へ13
3730
5

へ13
3730
6

へ 13
3730
5

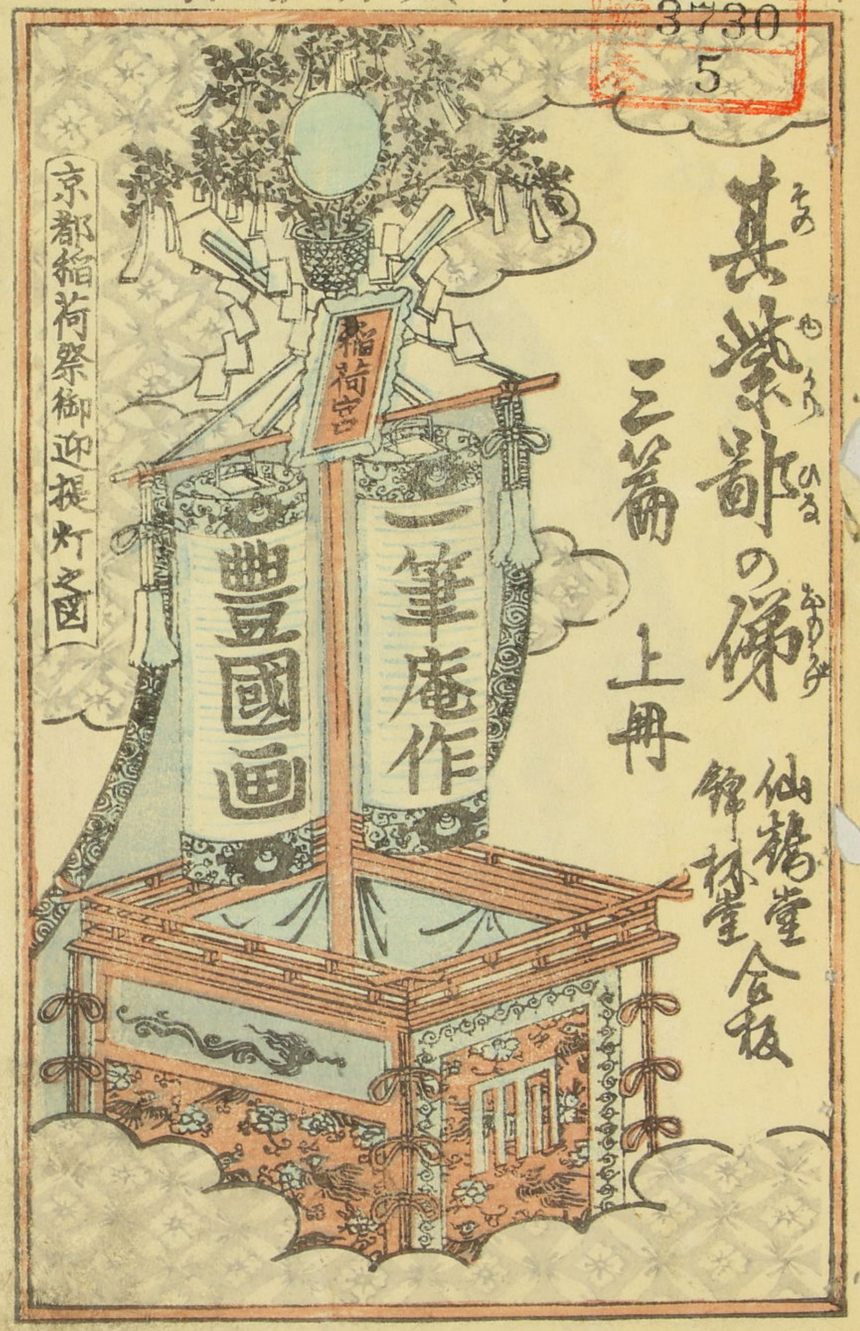
弘ベ13
3730
5

發春新歲申化

其業節の俤

三篇　上冊

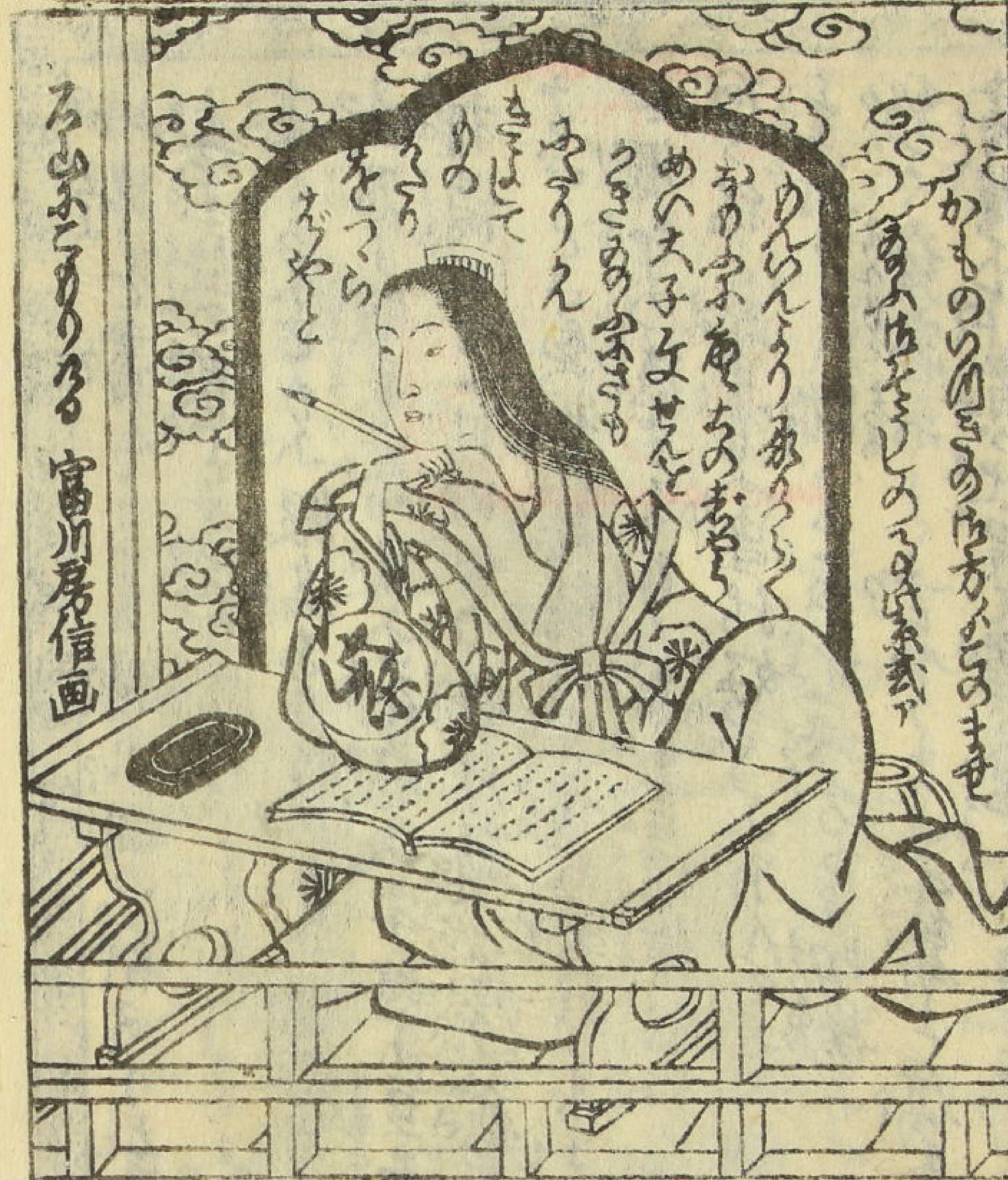
仙鶴堂
錦耕堂合板



京都稲荷祭御迎提灯之図

此序を書んとさら系特ふ一個の客あり吉平賣出せ一初編二編を
真果拉の卷とろ出り拉拉とふ如何ある者ぞと問れくこぬうめ部を
卷出る果ろりふ假名まり拉の貴ふ暫を書き茶賊ふ老筆を時給るあり
武器ふ腰卷蕎麥ふ花前物手越ふ豆蒔あり農夫ハ耕作ふ
種前のまとは田舍の種式蒔ハ爲まつハ實生を栽倍せんあるよ
ずぐとろ五拉ハ接拉ふ宜ふハ云ハとも夫と知ハ巨極ふ殺まり源太後
ご煙草の後ごとも皆人毎ふ言ふる僅時好ふ稱一迎ハを忘ひとふ
ハの字ハ頼ふ出ふ好ぐふ和んの南蠻此の表りめ
ふ不ハ先此方ふ切揚めて初秋迄懶隨俵ふ出ハ接ハ
ハ〻く發客ふ〻〻言ふうまご三篇を稿を終世ハ物草体ハ早ふ
書驛ふ作者ハ此られて答ふハ〻とて〻ハ私ハ〻ハ〻ハ味噌
をのげふハ卷拉の語釈の酢ふ醉さる如く辻後ハ〻ハ接拉ふ客ふ失て
果く帰り也序文の変ハとそふ仕ハ紙裏俤ふ誌て

貞享年間印本今様花紫物語出画を模写ス



書丁は金帋を寒くおもふね

維時弘化丁未歳初秋稿脱
同戊申年新春發兌

一筆菴主人識

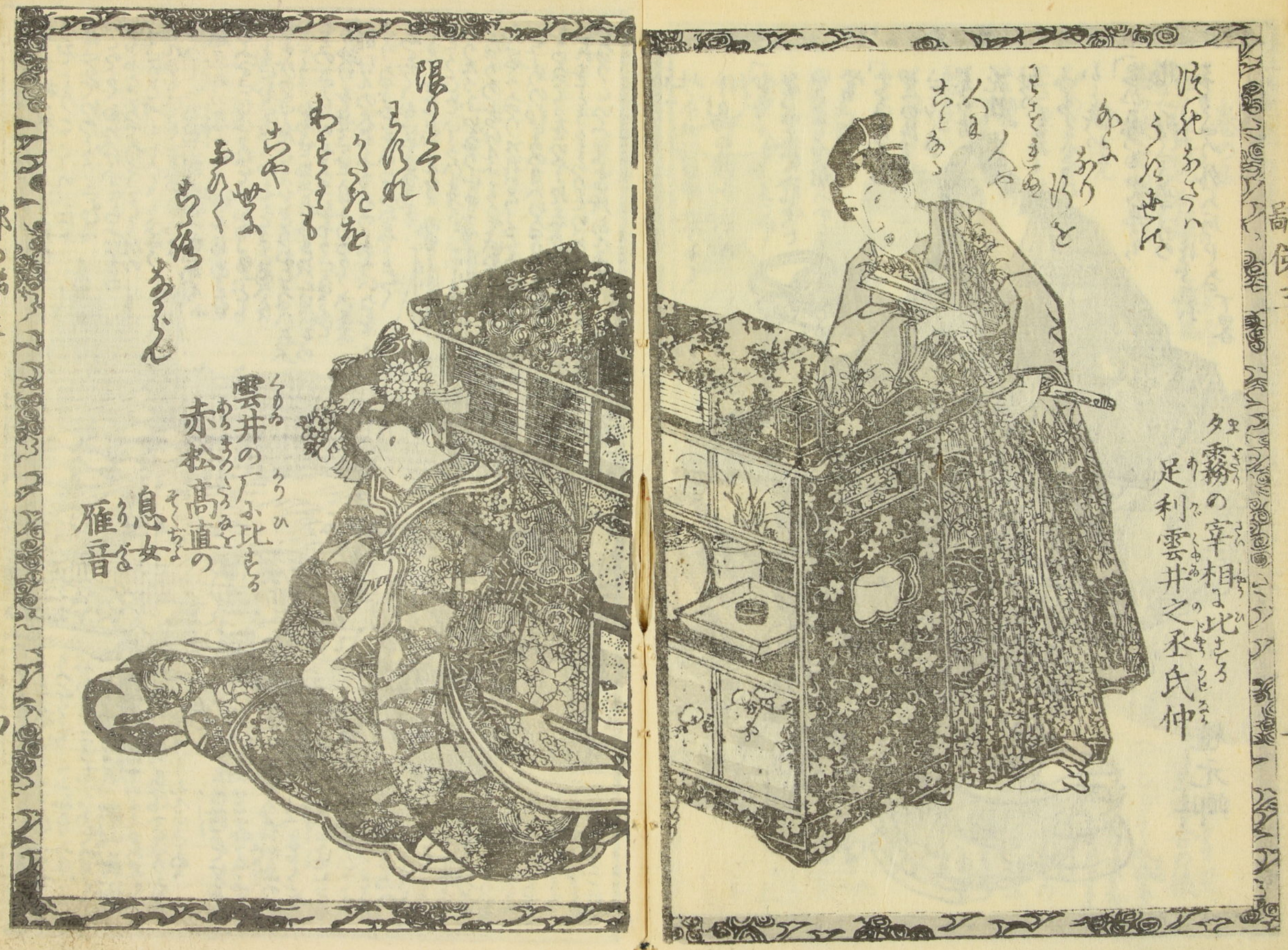
此巻ハ薫物と其外古文ニ
詠む其因ニ云り
花鳥餘情ニ薫物を埋む源を
尋ぬれバ梅花ハ梅の元ニ菊花ハ菊の
元に埋むと澄懐録ニ香譜ニ載唐
の書ニも梅花の薫物ハ香を翫ひとる
者諸香を合せ氣ニ梅花の如くなら
しむ是を称して返魂梅と云と見え
その後拾玉集ニ池の蓮と續
「水近く…かくさの雲
ひもとれる池のおもてを称ニ薫集類
抄ニ荷の香ニ擬して夏月殊ニ芬
芳を施せとあり又梅花ハ荷葉を
云てなしもの香ニよそへての侍從
と云ハ秋風凉しく…

このそべらう黒方ハ冬
ひらるべし。梅花ハ春荷葉
ハ菊花ハ落葉侍従ハ黒方ハ
六種ハ帝ア合せる薫物
ありと云是源氏物語梅
ヶ枝の巻ニ出たる
所なり正冊ニ
史ニ更て伽羅下
元を三種ニ号一巻
初音と号く其外ハ
めづらしかれバ…初音の
とそ其れハ白菊と号く
…雉の言ん白歌よりの
白菊の花…号く世の中の
うたを…
わらん薫の合の章より…
名香ニて喜撰の…利益ハ
…狂言綺語時代ちかれの合

■薫物合する巻之凡
おもしろき男踊の…
稲村祭ニよ
…くさく此
三篇の
趣向と
せり

巻の名
耀元琵琶を弾じて催馬楽の
梅ヶ枝を唱ふ
薫物合の後
足利の室
此糸の上

千鳥の曲
琴の音
下略
足利
耀元卿

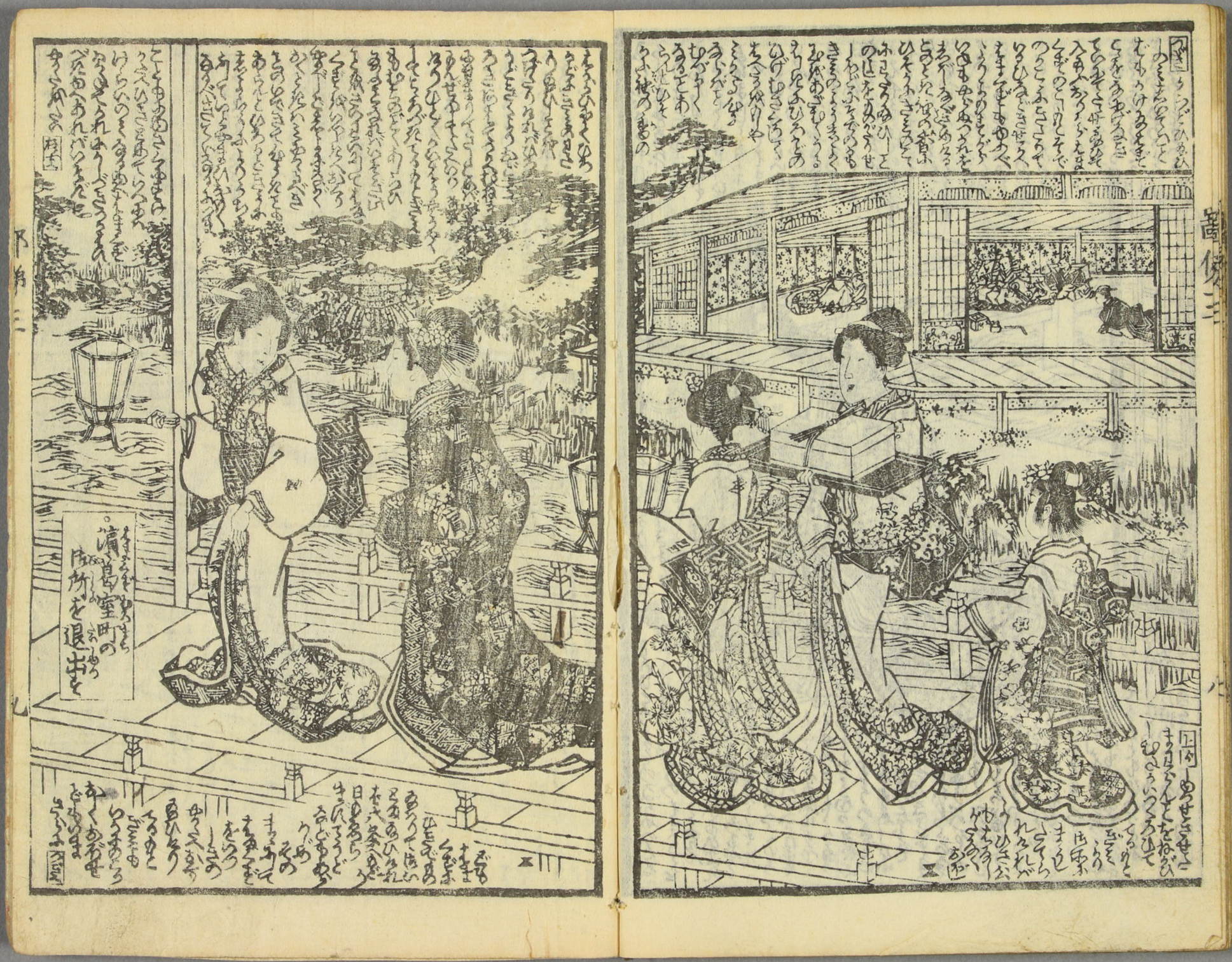


夕霧の宰相に比する
足利雲井之丞氏仲

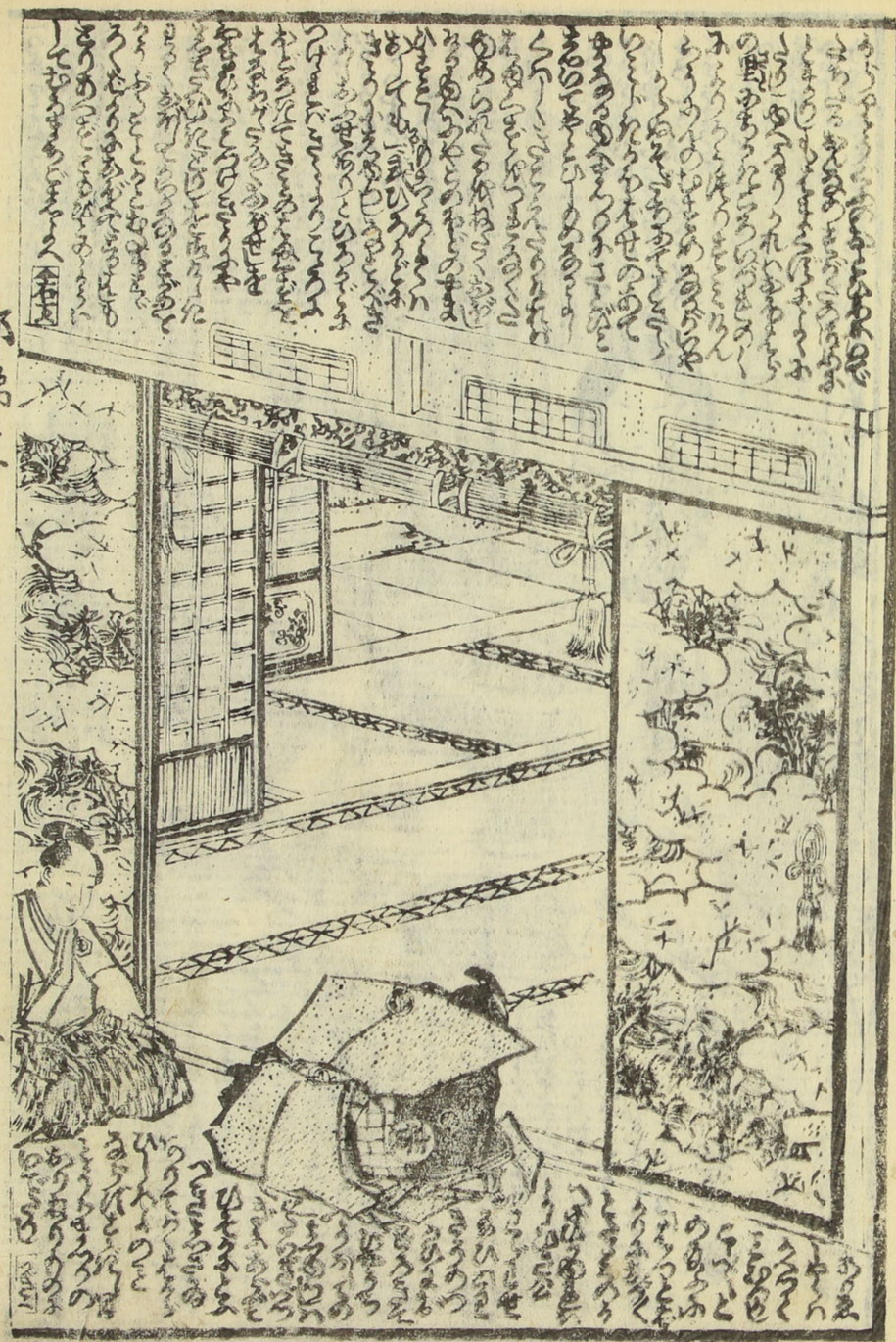
雲井の丞に比する
赤松高直の
息女
雁音

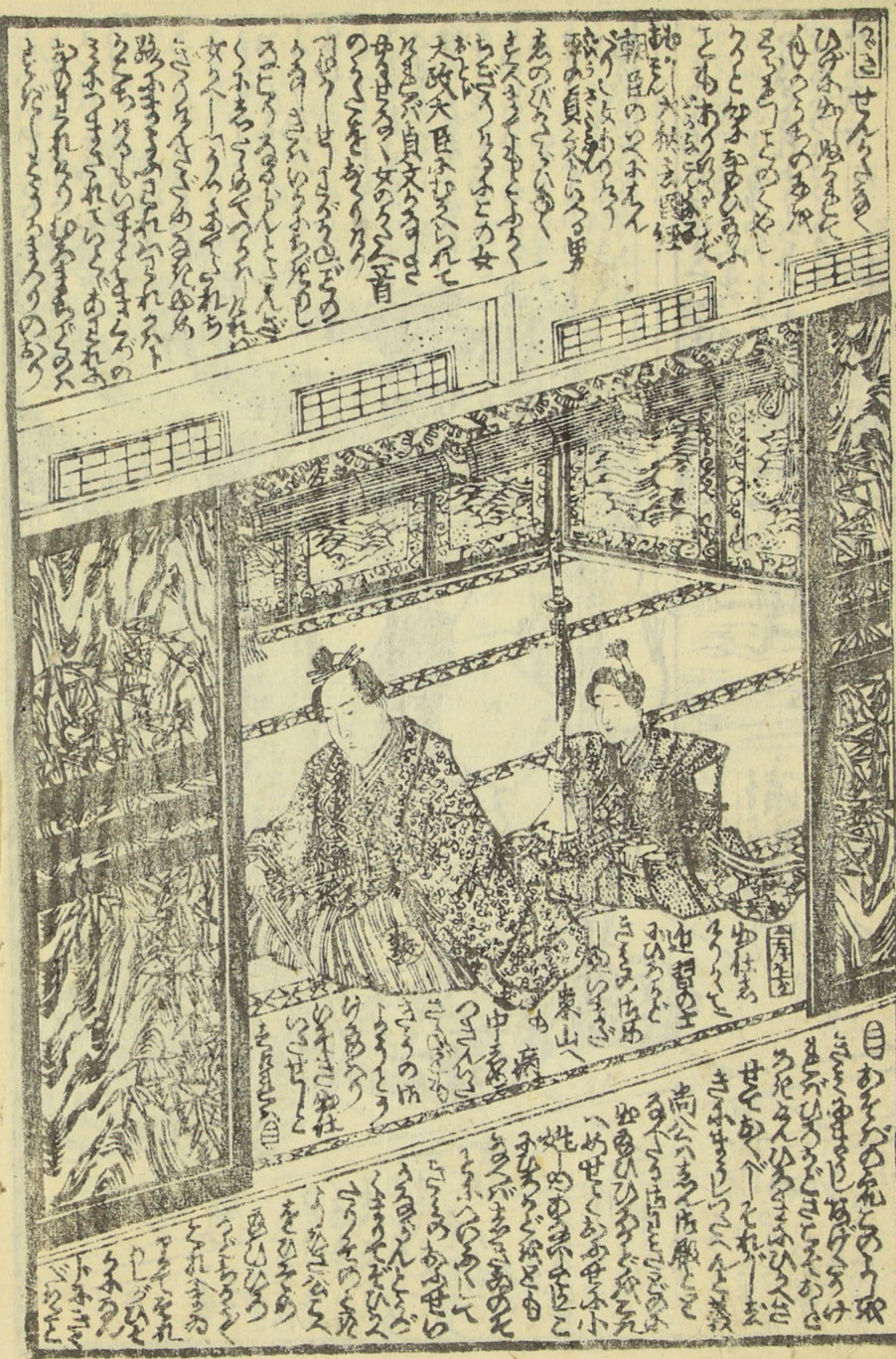
神田祭
天門人国政画

國政画



濱の島室町の陣所を退出せ





新増正字玉篇大全

横本一冊

玉篇ノ世ニ行ハルヽ既ニ尚シ屢翻刻ヲ経テ點畫正カラズ訓譯ノ訛甚多シ今字典ニ據テ悉ク文字ヲ改メ更ニ遺漏ヲ増補フ萬有餘字猶且校讐年ヲ積ミ鏤板精好ヲ極メレバ披覽繁然是ヲ舊版ニ比スレバ豈啻ニ霄壤ノミナランヤ実ニ海内無比字書中ノ最第一ト云ベシ敢テ誇ロニ非ズ閲シテ其言ノ妄ナラザルヲ知リ玉フベシ

蘭山先生著

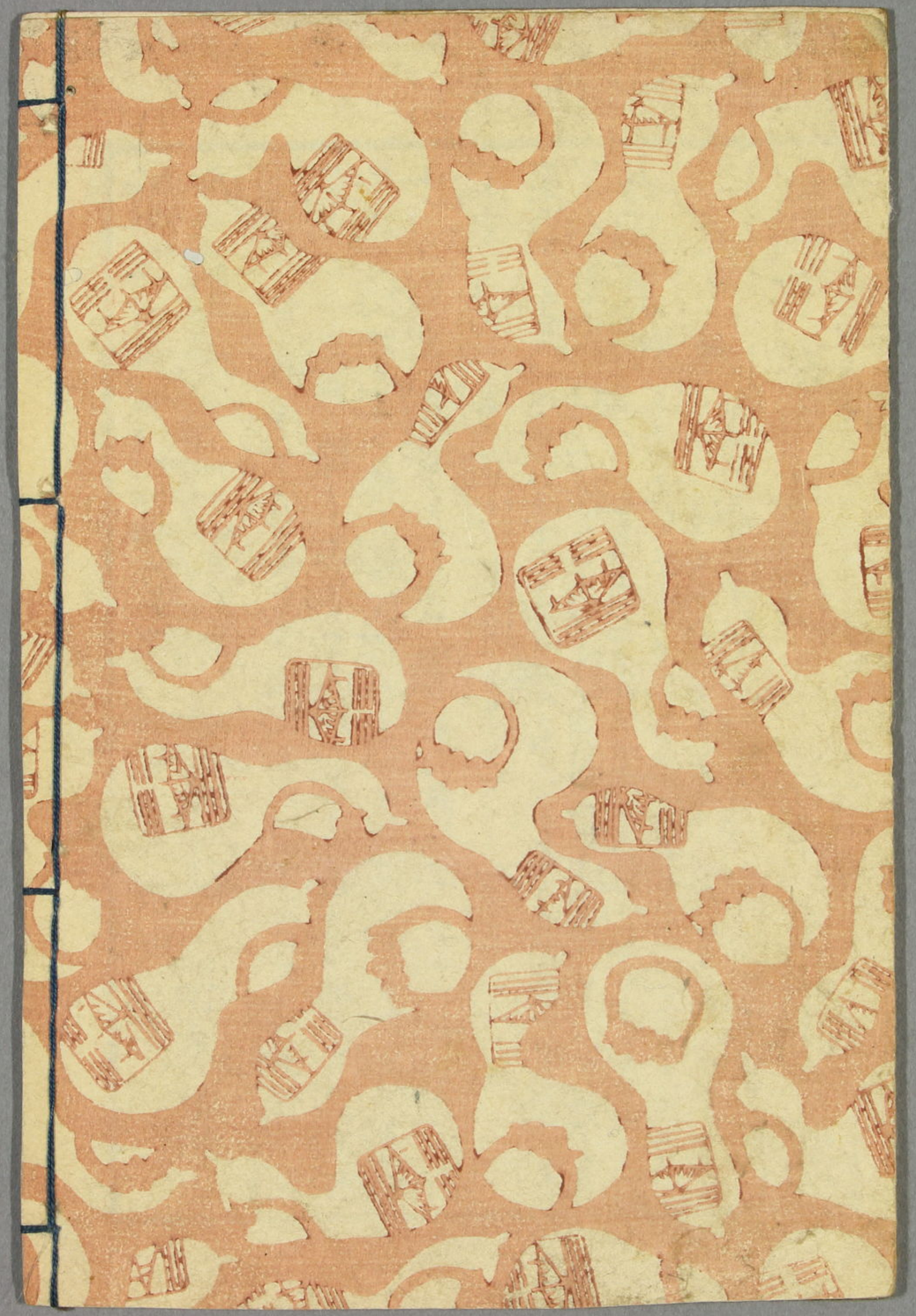
女用文結

大本一冊

女の男に送りて物の約やくそくを外にとするなれば長ながしかもくどくたとへばふまことなるもの扨はなさけ紙なりあるる木綿のるるとその深きをもこころちそのかくの文字をあげてとぐくのこゝろ(を)をかの扨式のみのいやうまきて(たんざく)にかうちのあるくめやうに事の折形むすび形とも物の品を出して何出をとゝのへて洗ふとゝけるグあるこゝろ

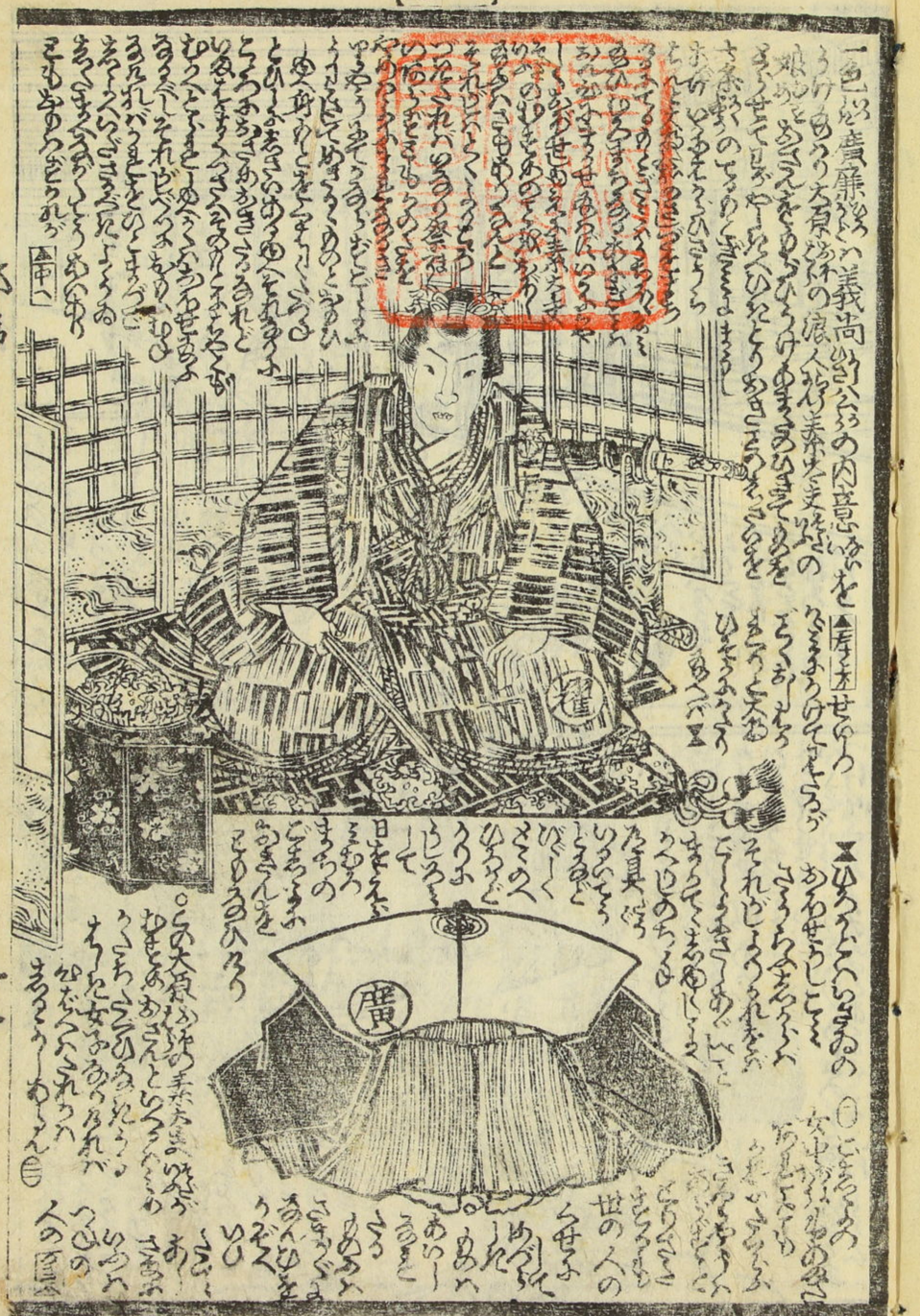
鶴賀新内正本所

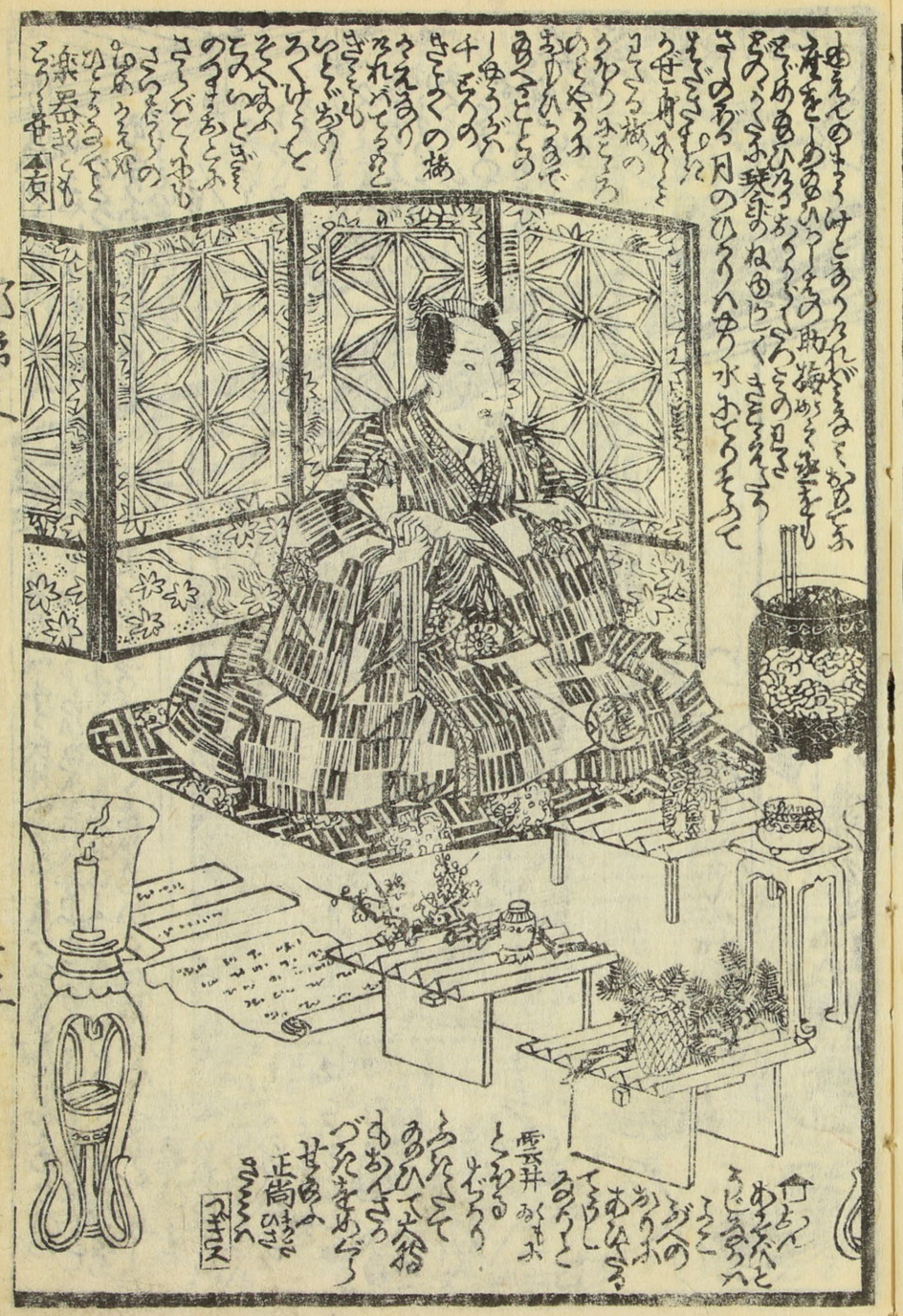
和泉屋市兵衛

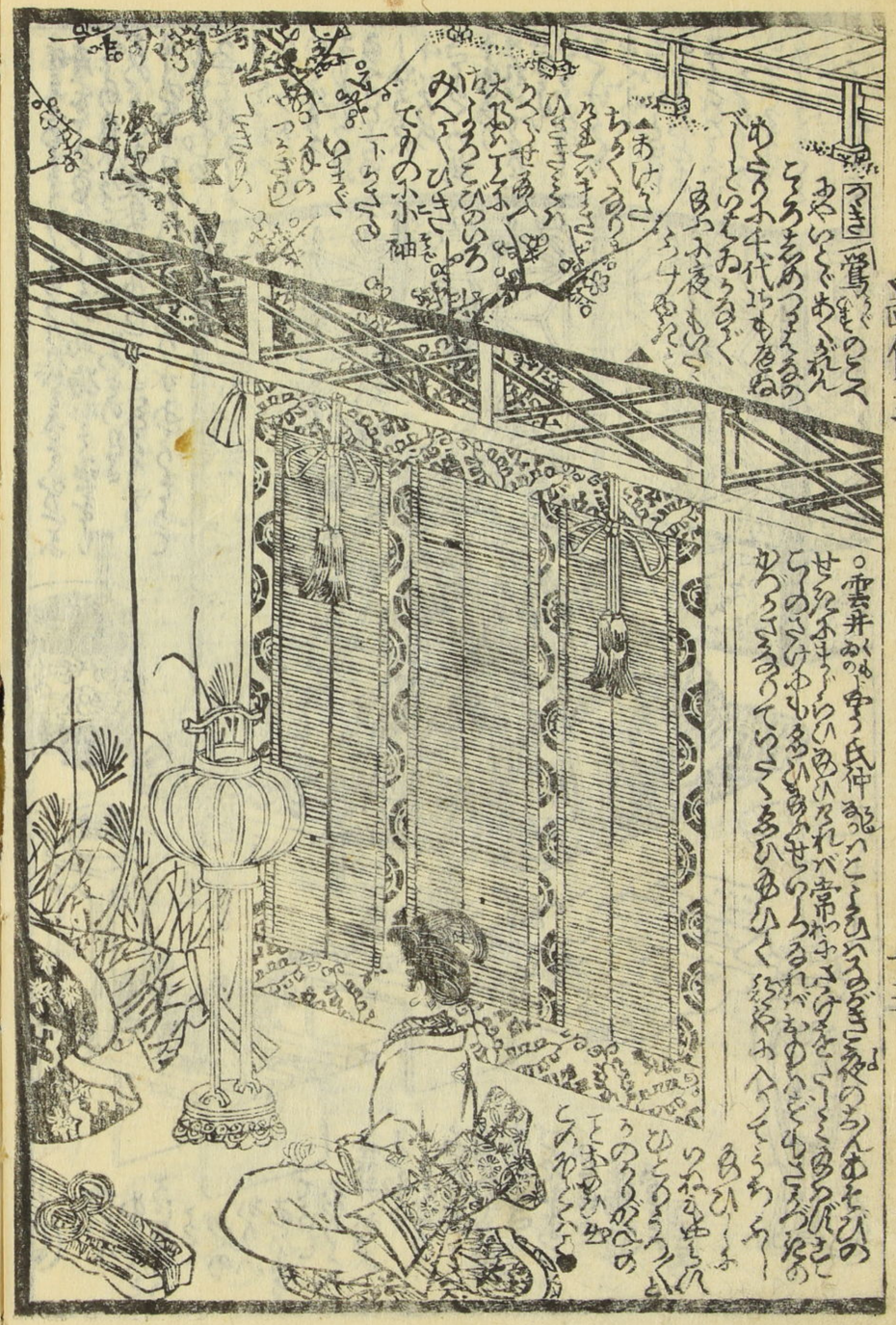


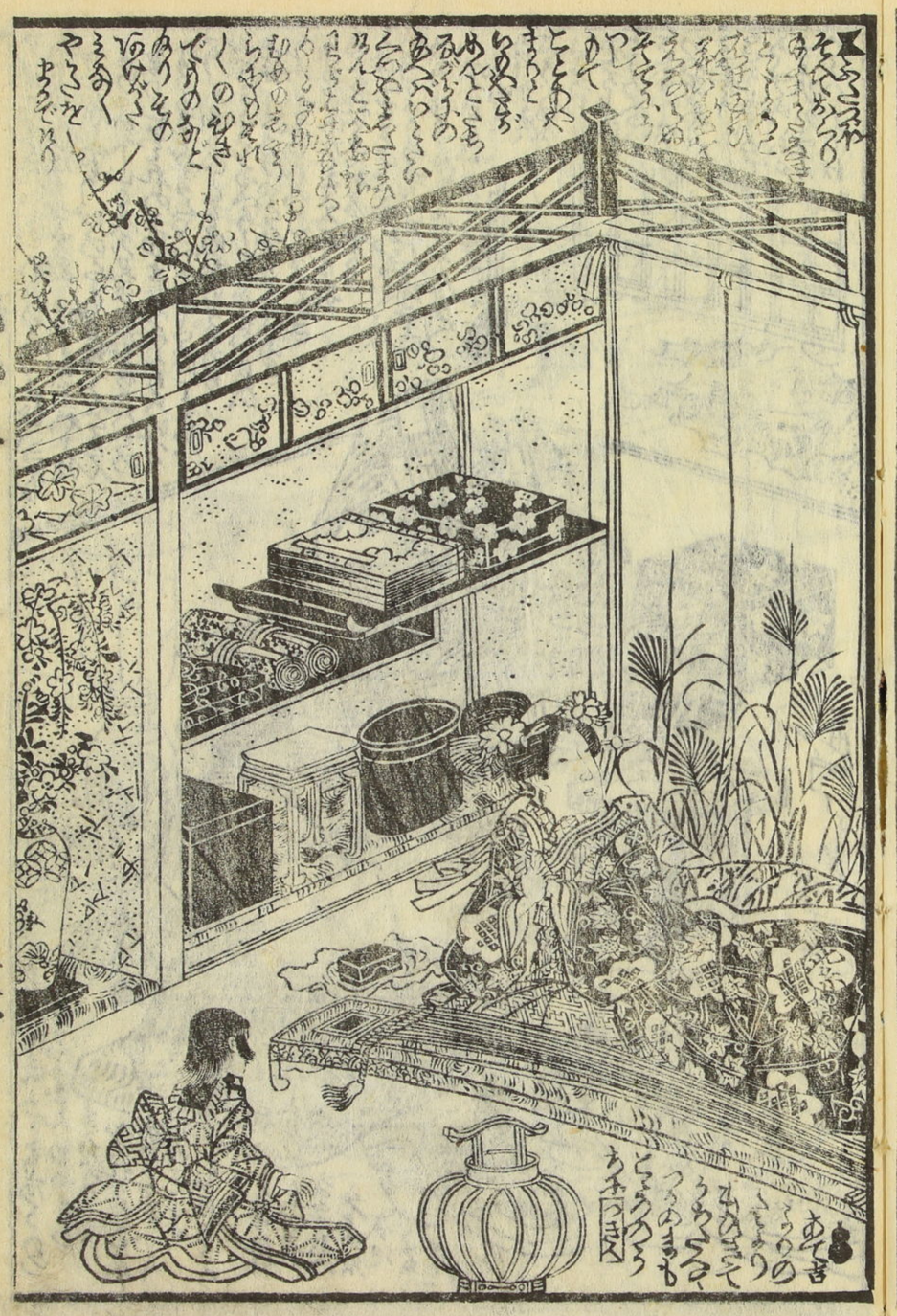
へ 13
3730
6

門へ13
3730
巻 6









柏

豊國画一筆菴主人作

梅の花の春こそ
あらまほしき
迎慶招福
めでたく〳〵
儒書
柳枝

新編金瓶梅十集 全部 曲亭馬琴作 一陽齋豊國画

女郎花五色石碁 二編 曲亭馬琴作 三編 一陽齋豊國画

児雷也豪傑譚 八編 美圖垣笑顔作 九編 一陽齋豊國画

菊花壇養種 初篇全一冊